

Akmy

メール多貴



泡蔵
AWAZO

あとがき

.....

180

5

.....

157

4

.....

135

3

.....

119

2

.....

99

1

.....

84

指示メール

4

.....

61

3

.....

43

2

.....

27

1

.....

10

予知メール

黄昏の教室

.....

3

黄昏の教室

蜂蜜をこぼしたように教室は夕焼け色に染まっていた。

部屋の内深くまで差し込む陽射しは、音までも飲み込んでしまったかのように世界に静寂をもたらしている。なにも置かれていない教室はこのほか広く、どこかよそよそしさを感じさせた。そんな沈黙に包まれた教室の中心では、10人の男子生徒が円を描くように並んで立ち尽くしていた。

明暗を濃くする陽射しのせいで表情を伺うことはできないが、全く動かない男子生徒を見ているとまるで人形が並んでいるかのようでどこか不気味だった。

「そんな異彩を放つ男子生徒達を凌駕するように、それこそが怪異の根源であるかのように、それは静かに存在していた。

沈みかけの夕陽が差し込む何処にでもある黄昏時。窓の外には夕暮れの街並みが広がっている……はずであつた。

しかし、窓の外には見慣れた日常などなく、シミ一つない真っ白い闇が張り付いているのだった。

真っ白い荒野が続いているかのように何処までも広く――

真っ白い海に沈んでいるかのように何処までも深く――

まさに常軌を逸した世界がそこにあつた。

外界と遮断され、光の音さえ聞こえてきそうな静まりかえった教室に、ゆっくりと音が甦ってくる。始めは小雨が降るように小さく、ボリュームを上げ雑音となり、そして人の声へと変わっていった。

「アッ……ハアア……ダメツ……気持ちよすぎちゃう……」

聞こえてきたのは艶めかしい少女の喘ぎ声、快楽に満ちた官能の旋律であつた。しかもその声は一つではなく、重なるように別の喘ぎ声も聞こえてくる。

「ダメだよ……壊れちゃう……でも……でも気持ちいい……」

円の内側では異なった制服を身に付けた少女二人が、複数の男子生徒に半裸で犯されていた。

「アアア……イクツ……また……またイクツ……」

歓喜の声と共に少女達が絶頂を向かえる。激しい痙攣と共に淫靡にとろける瞳を男子生徒に向け薄い笑みを浮かべる表情はとも少女のものとは思えない。それはまさしく快楽に墜ちたメスの顔であった。

少女達もまた異様な世界の住人であるかのように、怪異色に染まっていた。

そんななにもかも異常で塗り潰された教室の隅で、二人とは別の制服を着た少女が一人、膝を抱え小動物のように震えながら乱交の宴を見つめていた。

「……………」

涙を流し恐怖の仮面を被った少女の手には、大事そうに携帯電話が握られている。

何処にでもあるなんの変哲もない携帯電話……だが、この世界では何故か異質に見えた。

異世界の檻に捕らえられた少女は、近く訪れるであろう自らの運命を恐怖し、震えているのだろうか。

助けを呼びたくとも呼ぶことができない。この異常な世界では携帯電話など無意味……それをわかっている少女は携帯電話を握り続けた。それが唯一の助け、世界を繋げるアイテムだと信じて……

「な、なんで……」

消え入りそうな声が少女の唇から漏れる。その声が合図だったかのように、携帯電話はメールを受信すると勝手に文字を映し出した。

〈なんでって、これはあの子達が犯した罪。自らの苦しみから逃れるため、犠牲を払った者への報いなんだよ〉

「なにそれ……そんなこと言われたってわからないよ」

なにを言われているのかわからない。それなのにわかるような気がして恐ろしかった。文字の羅列が恐怖をあたえている。それでも目を離すことができない。

震えながら携帯電話を見つめる少女の前に、いつのまにか5歳ほどの少年が立っていた。

瞬間移動で現れたかのようになんの前触れもなく。始めからそこに立っていたかのように平然と――

「だ、誰……誰なの……」

少年に気が付いた少女は後退することもできず見上げる。

その問いに答えているのか、ベースボールキャップを目深に被った少年の口元が残忍に歪んだ。それは幼児と呼べる子供の笑みではない。例えるなら、そう、悪魔のような……

その笑みを見た途端、少女は全てを悟った。

この少年が全ての元凶――

この異様な世界を作った張本人――

答えを得た少女の身に更なる恐怖が流れ込んでくる。

「もういや、止めて……ゴメンナサイ……助けてよ……」

恐怖に耐えきれなくなった少女は、床に水溜まりを作り泣きじゃくることしかできなかった。その姿をあげ笑うかのように、少年はゆっくり口を開いていく。しかし、その唇からはなんの音も聞こえてこなかった。それでも少年は語っていた。携帯電話と言うコミュニケーションツールを使って……

〈あの子達を助けられるのはキミだけなんだよ。だから早く選んじやいなよ。簡単なことですよ。ただ選ぶだけでみんな無事に元の世界に帰れるんだからさ。心なんて痛まないでしょ。だって知りもしない人を犠牲にするだけなんだから。それともキミもあの中に混ざりたいのかな?〉

「……………」

その言葉に震えが止まった。その言葉で火照りを感じた。「違う」と叫びたいのに言葉にできない。

〈そうだよね。散々気持ちいい思いをしちゃってるから、躰が疼いてしょうがないでしょ。でも恐怖も知っている。ハハハッ、面白いね。恐怖と快樂つてのはどっちが勝つんだろう。ホント楽しみだね。でも選ぶなら早くしたほうがいいと思うよ。あの子達、これ以上したら戻ってこれなくなっちゃうから……………さあ、どうする?〉

少女は膝を抱え声を上げて泣き出した。いったい少女はどんな恐怖を知り、どんな快樂を知っているのだろうか……………

「ゴメンね。ゴメンね」

顔を上げ携帯電話を握り直すと親指を動かす。

「ゴメンナサイ。もうダメなの……………こんな苦しいの耐えられない。ゴメンナサイ……………本当にゴメンナサイ」
何度も何度も謝りながら、震える指で送信ボタンを押した。

〈アハハッ、やっぱりキミも他人を犠牲にするんだね。でも、それが正しい選択。人間の業ごうだからしょうがないよ。それじゃあ約束通りキミ達は解放してあげる。最高の快樂をタップリ味わってからね〉

少年は満足したのか満面の笑みを浮かべると陽炎のように消えていった。

そして完全に姿が消えると同時に、人形のように立っていた男達が無表情で振り返ると少女に襲いかかってきた。

「イヤアアアア……」

引き裂かれる制服の音と共に断末魔のような叫び声が教室に響き渡る。

しかし、その叫び声は数分もしないうちに熱をおび、いつしか甘い喘ぎ声へと変わっているのだった。